慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	張薦『霊怪集』について							
Sub Title	On the study of Zhang Jian "Lingguaiji"							
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)							
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会							
Publication year	2021							
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.171- 183							
JaLC DOI								
Abstract								
Notes	長堀祐造教授退休記念号 研究ノート							
Genre	Departmental Bulletin Paper							
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AA12310306-20210331-0171							

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

張薦『霊怪集』について

はじめに

溝部良恵

筆者は、 であり、 発生する前後にも、 研究対象は唐代小説の黄金期である中唐初期に書かれた単行の伝奇に偏る傾向があった。その結果、実際は伝奇が 以後唐代小説の研究は、この枠組みに沿って進められ、初、盛唐期は、特筆すべき作品がない空白期と考えられ、 品を経て、中唐初期に至り沈既済『任氏伝』、白行簡『李娃伝』などの作品が突如集中して書かれたとされてきた。 夫を加えると同時に、想像力を駆使し意識的に創作したものであり、初唐の王度『古鏡記』など数篇の先駆的な作 従来の唐代小説研究においては、唐代小説を代表する伝奇は、六朝志怪の後を継ぎながら作者が構成、 以上のような状況に対し、 またそれらの作品が伝奇の発生にいかなる影響を及ぼしたのかについても、 伝奇を上回る膨大な数の志怪風の作品が書き継がれ伝奇と併存していることが見落とされがち 伝奇発生の過程を解明し、新たな唐代小説史叙述の視座を提出するためには 解明されないままであった。 描写に工

の牛粛 この時期の小説の制作状況の全体像を明らかにすることが必要であると考え、特に重要な小説集として、唐代初期 初、盛唐期から中唐初期、伝奇発生以前の作品を分析し、それらを積み重ねつつ、各作品間の影響関係に考慮し、 『紀聞』、中唐初期の戴孚『広異記』に着目してきた。

しての全体的な研究は、これまでほぼ行われてこなかった。そこで本稿では、『霊怪集』の作者張薦及び逸文につ 巻六九、以下『広記』と略す。)、「王生」(『広記』巻四五三)など幾つかの篇について言及される以外、小説集と 五)頃に成書したと考えられる張薦の『霊怪集』がある。しかし従来『霊怪集』については、「郭翰」(『太平広記 て明らかにし、『霊怪集』研究の端緒としたい。 以上のような問題意識の中で、もう一つ注目すべき小説集として、中唐の初め、徳宗の貞元年間 (七八五 八八〇

二: 張薦について

宗実録』巻三、また張薦の孫の張読の墓誌銘、「唐故通議大夫尚書左丞上柱国賜紫金魚袋贈兵部尚書常山張公墓誌 銘并序」(徐彦若撰、 張公墓志銘並序」(『権徳輿詩文集』巻二十二所収。以下「張薦墓誌」と記す。)が残されている。そのほ 八一八)による墓誌銘 張薦は、字は孝挙、深州陸沢 以下「張読墓誌」と記す。)にも張薦に関する記述がある。 「唐故中大夫守尚書工部侍郎兼御史大夫史館修撰上柱国賜紫金魚袋充弔贈吐蕃使贈礼部 (現河北省)の人である。『新唐書』巻一六一に伝がある。また権徳輿(七五九 か韓愈 尚 順

られる張鷟である。張鷟については、新旧『唐書』「張薦伝」や莫休符『桂林風土記』にも記載がある。 これらをもとに張薦の生涯についてたどってみたい。祖父は、『遊仙窟』、『朝野僉載』、『龍筋鳳髄判』 張鷟は などで知

61

成書の時期は定かではないが、

現存する逸文には大中五年頃までの話があり、

(八五一)、十八歳頃に及第したと考えられる。

大和七年

(八三三) に生まれ、大中五年

験参考書とも言うべきものである。 0) 期 られて以降、 崔十娘を名乗る美女と一夜を過ごす 金をはたいてその文章を買って行ったという。 政治への鋭い批判が含まれている。 の朝野における出来事を記した書で、 い頃より文名をはせ、 多くの写本や刊本が作られ、 弱冠の年に **『遊仙窟』** 「下筆成章」科の科挙に及第した。 また 正史には出てこない当時の風俗、 日本文学に大きな影響を与えたといわれる。また『朝野僉載』 『龍筋鳳髄判』 は、 周知の通り、 中国では早くに失われてしまうが、日本では、 は、 張鷟自身と思われる主人公張生が神仙 科挙の試験に課された判の文書の例文集であり、 新羅や日本の使者が唐を訪 習慣などが記され、 その中の多くに 奈良時代に伝え の窟に迷い込み れた際には、

な い⁵。 薦の父については、これらの文章では、 揚州天長県令になった経歴が書かれているが、それ以上詳細 は定かでは

亡くなった際に、弔祭使として吐藩に赴くが、その地で病に倒れ、 者として知られる牛僧孺の娘である。 書まで進んだ。希復は、 張薦には、八人の息子がいたが、その一人に希復がいる。 聡明であった。 張薦自身は、 自分の見聞きした異聞を語っており、 顔真卿に認められる。 天宝三年(七四四)に生まれた。七歳で詩を作り、 『酉陽雑俎』の作者である段成式と交流があったことが知られている。 この希復と牛僧孺の娘の息子が、『宣室志』 史官を長く務め、 『酉陽雑俎』 中に四則が残されている。また希復の妻は、 尚書工部侍郎など要職を歴任した。その後、 希復は、 貞元二十年(八〇四)六十一歳で亡くなった。 十歳で『史記』を読みこなすなど、幼少期 河南府士曹、 集賢校理などの職を務め、 を書いた張読である。 希復自身も段成 「玄怪 吐藩 の首 礼部尚 より

張読の青年期に書かれたもの 173

0

と考えられる。『宣室志』も早くに原書が失われたが、十巻ほどあったと思われ、中には、中島敦の『山月記』 あらすじを同じくする化虎譚「李徴」(『太平広記』巻四二七)がある。 ع

題意識としてあげた、六朝志怪から唐代伝奇へという小説史の流れを考えていくことと重なり、 例として終わることなく広がりを持つ問題と思われる。 小説制作にかかわり、それぞれの作品が、次の世代にどのように引き継がれていったのか、これは冒頭に筆者が問 た原動力として、こうした家庭や友人との交流関係が大きく影響したものと推測できる。張薦の一族がどのように 以上にあげた書名は、いずれも唐代の各時期を代表する小説といえるものであり、張薦自身が 張薦の一 『霊怪集』 族の 事

三:『霊怪集』逸文について

ていない。 一方、『新唐書』芸文志、小説家類には、『霊怪集』の巻数は、二巻と記されている。 本及び権徳輿の「張薦墓志」には、 張薦が『霊怪集』を著したことは記されているが、

之列仙、 また戴孚『広異記』の序として記された顧況「戴氏広異記序」では、顧況が「本朝志怪之志」として、 葛稚川之神仙、 王子年之拾遺、 東方朔之神異、 張茂先之博物…」など、顧況が考えた歴代の志怪の書名が

列挙されているが、そこには以下のようにある。

国朝燕公梁四公伝、 唐臨冥報記、 王度古鏡記、 孔慎言神怪志、 趙自勤定命録、 至如李庾成張孝挙之徒、 互相伝

7.4

したい。

ことである。また「互相傳説」とは、李庾成の書と張薦の書、すなわち『霊怪集』のことを指すと思わ 李庾成、 朝、 張孝挙の名があがっている。 つまり唐代について、唐臨 『冥報記』、王度『古鏡記』の書名などとともに、書名はあげられていない 李庾成についての詳細は不明であるが、「孝挙」は張薦の字であ n 張薦の

たのではないかと考えられる。 遷され、貞元九、 いたのではないかと思われる。 を持っていたかどうかはわからないが、「序」には、戴孚が饒州(現江西省)で五十七歳の生涯を終えた後、 の息子達が顧況に「序」を書いてほしいと懇願してきたと記されている。顧況は、 もに至徳二年(七五七)の科挙に合格したことから、交流を始めたと考えられる。 戴氏広異記序」には、顧況がこの序を書くに至った経緯が書かれている。顧況と『広異記』の作者戴孚は、 十年頃まで饒州にいたようである。恐らくこの頃、戴孚の息子達により「序」の執筆を依頼され 以上から、貞元年間(七八五一八〇五)頃には、『霊怪集』は人々に広く読まれて 貞元五年 顧況と戴孚が、 (七八九年) 饒州に左 生涯を通じ交友

『霊怪集』の逸文について考察を加えたものとして、以下の諸本に収録する各話を比較し、現時点での逸文を確定 記』、『太平御覧』、『類説』などを中心に逸文が存在する。中でも最も多いのは、『広記』に残された逸文である。 しかし『広記』自体に、 しかし宋初の書目 『通志略』では、 版本の問題があり、また『霊怪集』の逸文についても出典問題などがある。そこで以下、 作者不詳、 巻数も一巻となり、すでに散逸していたようである。 広

一. 陶敏主編『全唐五代筆記』(三秦出版社、二〇一二年)

李剣国 『唐五代志怪伝奇叙録 (修訂本)』 (中華書局、二〇一七年) (以 下 『叙録』と略)

にかけての各書に散逸する小説、筆記について、作者、 ど前に李氏朝鮮で刊行された成任 印本として定評のある中華書局版 初版刊行の一九九三年以来、唐代小説研究に欠かせない書である。また、『太平広記会校』は、 存する 『全唐五代筆記』は、『広記』に限らず、 『霊怪集』の逸文の全体像を見ることができる。 『太平広記詳節』等と比較校勘し、多くの新しい成果を取り入れている。 『太平広記』を引き継ぎながら、台湾大学所蔵の孫氏宋本、 諸本に散逸する唐代の小説、 版本、流伝、 李剣国 『唐五代志怪伝奇叙録 篇目、後世への影響、評価を整理したもので、 筆記を集め、 校勘を加えたものであり、 (修訂本)』は、 談刻本よりも百年ほ 従来 『広記』の排 唐から五代 現

記」では、 いる。「表1」は『全唐五代筆記』 能性は低いとされている十話である。備考に『霊異集』、『霊怪録』とあるのは、『広記』に引用の書名である。 以下『全唐五代筆記』の収録の話を中心に、各書で判断の分かれる話について検討してみたい。『全唐 には、付表のように、『広記』十七話を中心として、合計二十三話の話が『霊怪集』の逸文として挙げられて 引用書名が正確な記載でないことが多々ある。 中において、『霊怪集』の逸文と判断された話であり、「表2」は逸文である可 Ī.

11 る。この点については、 「姚康成」について、『全唐五代筆記』は、『霊怪集』の逸文としないが、『叙録』においては、 内容に触れながら、 次節で検討してみたい。

之洛」との記載があり、 また22「南柯太守伝」については、 載『南柯太守伝』,与『枕中記』事絶相類』との記述がある。先にふれたように、『霊怪集』は宋初には 張薦の著作ではないことは明らかである。 周知の通り、作者は李公佐であり、 しかし南宋胡仔『苕渓漁隠叢話』 本文末尾に「公佐貞元十八年秋八月自呉 後集巻三八に

すでに散逸し、その後に編まれた『霊怪集』のうちには、他書の逸文も含まれていたことが推察される。 以上、現存する二十三話のうち、十三話もしくは十四話が『霊怪集』の逸文と考えられる。

表1『霊怪集』逸文

	篇名	出典	備考
1	郭翰	『広記』巻六八・女仙	
2	楊昭成	『広記』巻二八〇・夢鬼神	
3	関司法	『広記』巻二八六・幻術	
4	慕容垂	『広記』巻三二八·鬼	
5	河湄人	『広記』巻三三〇·鬼	霊怪録
6	中官	『広記』巻三三〇・鬼	
7	王鑑	『広記』巻三三○・鬼	霊異集
8	李令問	『広記』巻三三○・鬼	霊怪録
9	鄭生	『広記』巻三五八・神魂	霊怪録
10	王生	『広記』巻四五三・狐	霊怪録
11	張胡子	『広記』巻四六七・水族	
12	呉興妖童	『御覧』巻七一八	
13	房琯	『天中記』巻五六	

表2『霊怪集』の逸文ではないと思われる話

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	
顧光宝	南柯太守伝	崔韜	東蔡女鬼	薛放曽祖	張不疑	姚康成	鄭絪	曹唐	陳阿登	篇名
『説郛』(涵芬楼本)巻三	南宋胡仔『苕渓漁隠叢話』の記述による。	『類説』巻二九	『猗覚寮雑記』巻上	『広記』巻四四六・畜獣	『広記』巻三七二·精怪	『広記』巻三七一・精怪	『広記』巻三六五・妖怪	『広記』巻三四九・鬼	『広記』巻三一六・鬼	出典
『広記』巻二一〇引『八朝窮怪録』	『広記』巻四七五引『異聞集』	『広記』巻四三三引『集異記』	『広記』巻三二六引『志怪録』	穆宗(在位八二〇一八二四)の話。	開元年間(八三六―八四〇)の話。	怪集』の逸文とする。 「皇元年間(七八五―八〇五)の話。『叙録』では、『霊	元和年間(八〇六一八二〇年)の話。	五代の話。	『搜神後記』巻六収録	備考

四.『霊怪集』の特色

これらをもって『霊怪集』の全体像を考えるのは難しい側面もある。しかし残された逸文から感じ取ることのでき 現在残されている『霊怪集』の逸文は、もとは原書が二巻あったと考えられることからすれば、ごく一部であり、

る特色の一つとして、『霊怪集』 の中には、 話の描写を工夫し、読者を意識した記述が多くみられることが指摘

で

うになり、七夕の日には、夫の元へ戻る」という話である。天帝の怒りを買い、一年に一度しか会うことのできな 強さに思いめぐらし、 ようなことを想像し、語り合うこともあったのではないだろうか。 い牽牛と織女の話に、 例えば、 の話のようなこと、「もし一年に一度しか夫と会うことのできない織女が自らの元にやってきたら」という 「郭翰」は、「夫と七夕の夜にしか会うことのできない織女が、 連綿と語り継いできたものと思われる。しかしその夜空を見上げながら、 人々は、夜空に広がる天の川を見上げながら、引き離されてしまった夫婦の悲しさと想 郭翰のもとを訪れ、 時に人々はこの 枕を共にするよ

うに、ほとんど偶然のような不条理なものであることをも示してい ない身分の差を背負っていること、そしてそれは、 とっては言いがかりに近いものであるが、一方で、同じ年の子供が生まれた環境によって、一生変えることのでき に違いはないと言いながら、妖術で息子を孫と全く同じ姿にしてしまう」という話である。老婆が「主人と使用人 人の妻が慌てて子供を引っ張り出すが、二人とも孫の姿をしており見分けがつかない。老婆の理屈は、主人たちに であっても同じ年の人間ではないか」と主人に不満をぶつけながら、息子と孫をさっとスカートの下に隠すと、 人の孫はいつもある人の息子のお古をもらっていた。ある時、年老いた使用人がそのことを不満に思い、息子と孫 「関司法」は、「ある人の息子とその年老いた使用人の孫が同年代であったので、 老婆の妖術でいとも簡単に主人の子供も孫になってしまったよ る。 一緒に遊 んでい たが、 使用

が、 また10「王生」は、「林の中で立ちながら、文書を見ている野狐を見つけ、 狐が復讐にやってくる。 狐は、王の母には科挙に及第したので家産を整理して王の元へ来るようにという知ら 目にけがを負わせ文書を取り

な様子を見せる と王が科挙に及第したとの朗報に一族で喜ぶ家族が鉢合わせするようにたくらむ。 方法は手の込んだものであり、母死去の知らせに落ち込み実家へ急ぐ王生と、息子の成功を聞き喜びながら息子の せてみると、 王には母が亡くなったという偽の手紙を送る。そして悲しみにくれ葬儀の用意をしながら故郷に向かう王生 白紙の紙になっている」という話である。 (日晩, 柏林中見二野狐 倚樹如人立,手執一黄紙文書, 冒頭から、狐は、人のように立ち、いかにもいわくありげ 相対言笑, 傍若無人)。また王への復讐 互いに送られた手紙を突き合わ

で読者を驚かせる方向へ向かい、読み物としてのおもしろさを意識して書かれている点である。 以上の三話に共通するのは、それぞれの描写は、不思議な出来事を記すことが主眼というよりは、 様々な仕 掛 it

狐の復讐の残酷さを際立たせていて非常に印象的である。

元へ赴く母達の対比は、

邢 荒れ放題であった(「其宅久空廃,庭木森然」)という記述との整合性を考慮し、この話は後に 『旧唐書』に基づき、 汧隴 0) れたと判断している。 び声がした場所を訪ねてみると、鉄の銚子、笛、 て違和感はない。また前任者がいなくなり荒れ放題の赴任地の屋敷では、怪異現象が起こり、 人が詩を吟じる声が聞こえてきた。康成は、三人の姿を見ようと屋敷の外に出たが、見失ってしまった。 原因を明らかにするといういわゆる凶宅譚は、『広記』 君牙が任地を去った後の邸宅と考えれば、『霊怪集』中の話である可能性も考えられる。そしてこうした仕掛け 以上のことを踏まえ、 (現陝西省) に使いし、 邢君牙が亡くなったのは、 しかし、こうした明らかに読者を意識 前節で取り上げた17「姚康成」について考えてみたい。内容は、「太原掌書記 長い間空き家となり荒れ放題であった邢君牙の旧宅に泊まったところ、 貞元十四年 箒があるのみだった」という話である。『全唐五代筆記』では、 の中にもよく見られる話であり、 した仕掛けを持つ話は、 (七九八) であることから、 張薦が記 旧宅が長く空き家となり 姚 康成が尋ねたの 新任者が訪れ、 したと考えてもさし 『霊怪集』に加えら 夜中に三人の 0 翌朝、 姚 源成 が

可能性もあるかもしれない。 を持つ話は、『玄怪録』 中 'n 「元無有」とも共通するところであり、 姚康成」 を『霊怪集』の逸文とするか否かは、 牛僧孺は、 類話も含め、 『霊怪集』からこの話の着想を得た さらなる検討が必要と

五.終わりに

及び同時代の があると考える 以 の分析を進めていきたいと考えているが、その際に、張氏一族の小説制作の中における『霊怪集』 上の通り、 「紀聞」 『霊怪集』 や『広異記』との比較という二つの視点を意識して、『霊怪集』 研究の端緒として、 作者張薦と 『霊怪集』の逸文について考察を試みた。 の性格を考察していく必要 の位置づけ

切磋 景があったと考えられ、 中唐期の伝奇を代表する作品が白居易、 なくされる太原の王氏の一族の間で語り継がれていた物語と考える。 解明されていないことが多い。例えば小南一郎氏は、『古鏡記』は、 同 六朝や唐の小説は、 |琢磨しながら小説制作を行う環境があったことを指摘している。以上のように唐代の小説制作には、 唐代小説史研究において考察されるべき問題を解く手がかりにもなると思われる。 作者の詳細や各話、 張氏一族の小説制作についても解明が待たれる。また冒頭にも指摘したように、このこと 元稹のいわゆる元白集団の周辺で書かれていることに着目し、彼らの間で、 小説集ごとの影響関係は不明なことが多く、 隋から唐への時代の変化の中で、没落を余儀 また白行簡『李娃伝』や元稹 その制作環境については、 『鶯鶯伝』 様々な背

11

また筆者がこれまで明らかにしてきたように、『紀聞』や『広異記』には、それぞれ作者が意識して虚構を用

分析を通して、改めて『紀聞』 ている話が含まれている。中唐の伝奇発生以前に、各小説集でどのような試みがなされていたのか、『霊怪集』の や『広異記』の性質も浮かび上がるものと思われる。以上を今後の課題とし、

注

を進めていきたい。

- (1)牛肅『紀聞』について―「呉保安」を中心に」(『中唐文学会報』第十一号、二〇〇四年所収)。「伝奇勃興以前の唐 中国学会報』第五二集、二〇〇〇年所収)。『唐代初期小説の研究―牛肅『紀聞』と戴孚『広異記』を中心に』(東京 代小説における虚構について―「淮南猟者」(『紀聞』)と「安南猟者」(『広異記』)の比較分析を中心として」(『日本 大学提出博士論文、二〇〇九年)
- $\widehat{2}$ 篇ほどしか見られない。(二〇二〇年、十一月二十四日閲覧) 局、二〇一七)など。またCNKI(中国学術文献オンラインサービス)には、『霊怪集』を主に扱った論文は、 程毅中『唐代小説史』(人民文学出版社、二〇一一年)「霊怪集」、李剣国 『唐五代志怪伝奇叙録 (増訂本)』(中華書 川
- (3) 郭広偉校点『権徳輿詩文集』(上海古籍出版社、二〇〇八年)
- (4)「張読墓誌」は、洛陽九朝刻石文字博物館 に収められる。これまで張読の伝記については不明な点も多く、この墓誌は、貴重な資料である。またこの墓誌につ いての論考として、陳尚君「『宣室志』作者張読墓誌考釈」(『嶺南学報』復刊第七輯、二〇一七年所収)がある。 斉運通、楊建鋒編『洛陽新獲墓誌 二〇一五』(中華書局、二〇一七年)
- (5)「張薦墓誌」に「烈考不忒,揚州天長県令,贈睦州刺史。」とあり、「張読墓誌」には、「曽祖不忒,皇揚州天長令」 とある。
- (6) この指摘については、前掲注4陳尚君論文参照。
- 〔7〕『太平広記』については、張国風『『太平広記』版本考述』(中華書局、二○○四年)、拙稿「北京図書館所蔵

について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第五号、二〇〇二年所収)を参照。 記』抄本について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第一号、一九九八年所収)、「成任編刊『太平広記詳節』

『太平広記詳節』については、前掲注7の各書を参照。

8

〜9)小南氏の論考については、『唐代伝奇小説論―悲しみと憧れと』(岩波書店、二○一四年)を参照。

183